

用煉瓦貨車積

” 十月 スホイロスク収容所にて伐採作業

昭和二十三年七月 スベルドロフスク収容所にて雑役

” 十月二十三日 ナホトカ収容所

” 十月二十五日 ナホトカ港より永徳丸乗

船

” 十月二十八日 舞鶴港上陸

” 十月二十九日 復員

シベリア抑留記

京都府 谷 才 治

生年月日 明治四十四年二月一日生

現住所 京都府船井郡丹波町須知鍋倉七番地

元陸軍兵長

職 業 指物大工(現在 老齡無職)

昭和十九年三月十三日、現住所より京都伏見歩兵連隊へ入隊する。祖母、妻、子供四人計六人を残す。

昭和二十年、当時は北京春兵団にて八路軍(中国共産

軍)討伐のため北支各地を転戦していた。七月ころ

ソ満国境にソ連軍集結しつつあるとの情報により、

モンゴル方面よりのソ連軍の侵攻に備えて、古北口

の万里の長城の上にて警備していた。

昭和二十年八月十五日 終戦。

九月上旬、ソ連軍による武装解除を受ける。

九月下旬、我々の隊はソ連兵着視のもとソ連領に入る。

抑留地はモンゴル人民共和国の首都ウランバートル

で強制労働につく。何年か後にも日本へ帰ること

ができるか?それが何よりの心配だった。

労務は自動車修理工場でトラックなどの木部の取り

付けや取り替え、修理などであった。私の職業は指物

大工なので木工作业は得手で、若い兵隊を指図して自

動車の修理を行った。しかし、食糧が少ないので弱っ

た。朝食は、ヒエ、トウモロコシなど雑穀の粥が飯盒

の蓋に一杯、昼は黒パン三百グラム、夜は朝と同じ雑

穀のかゆだが少し濃い目とスープ(塩汁)だった。こ

れでは労働を癒すには少なすぎて夜寝ても食べ物の夢

を見るばかりだった。現地人の話では長い戦争のため、ソ連全体が食糧が不足していると言っていた。

広漠千里とはこのことか、どこまでも続くモンゴルの砂漠、夏でも夜になると冷え冷えとする。それが冬ともなれば、零下五〇度ぐらいまで下がる。朝の作業出発の午前七時半になって、零下三五度以下の場合気温が上がるまでは待機させられる。三四度ぐらいになって現場へトラック出発となる。兵隊は身を寄せ合って凍土を走るトラックにゆられていた。

翌二年目の労務は木工場であった。工場や個人家庭で使う木製の道具や家具などを製作する。机、椅子、戸棚から寝台なども作っていた。日本では家具などにニスを塗っていたが、ここではそんなものは無かった。白木地のまま仕上がりだった。二年目になっても相変わらず食糧不足だった。来る日来る日も雑穀粥と塩汁で空腹を抱えての労役だった。

昭和二十二年十一月の中旬、モンゴル大陸に冬が訪れ、大地が凍り出したころ、突然貨車に詰め込まれてナホトカに運ばれた。各地の収容所で労役についてい

た日本の兵隊たちが続々と集まってきた。この海の向こうが日本だと思うと一日も早く帰りたい。わいわい言っていたが、迎える船はまだ来ていなかった。薪運びや民主教育などに一週間ほど経たある日、引揚船が港に入ってきた。揚げられた大きな日の丸の旗を見ると胸が熱くなり、涙がこぼれた。

昭和二十二年十一月二十二日、舞鶴港へ無事上陸することができた。

悲惨を極めたモンゴル抑留

広島県 塩谷 静夫

私は、弘一五六三部隊に入隊し、昭和二十年六月六日、北支（河南省）開封を出発、二十年七月三日満州国龍江省洮南^{ちゅうなん}に着き、主力はソ満国境のハイラルに配備されていました。

八月九日午前三時、ソ連軍が日ソ不可侵条約を一方的に破り侵入して来た。私は牡丹江に出張していて、